

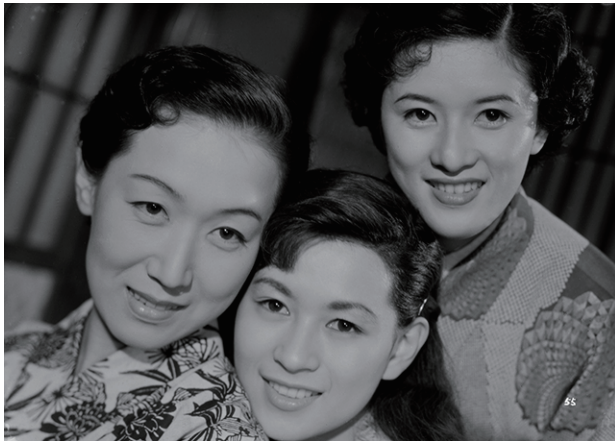


「月は上りぬ」 1955 年製作 / 102 分 / 日本 / 配給：日活  
 脚本：斎藤良輔 小津安二郎 監督：田中絹代  
 名月冴える公園で…恋知り染めたお嬢さん…  
 若き日の愛歎が 青春の微苦笑が…小津芸術の香り高き名脚本  
 の中に 豊かに真実の息吹をのぞかせて  
 天平の夢誘う奈良に繰りひろげる 観月の宴 (予告編字幕より)

浅井家は父、浅井茂吉 (笠智衆)、長女の千鶴 (山根壽子)、次女の綾子 (杉葉子)、三女の節子 (北原三枝) の四人暮らしです。茂吉の妻は既に他界。千鶴も夫と死別しています。

それでも四人は、戦時中に東京を離れて住み着いた奈良の地で和やかな毎日を送っています。家の近くの寺に下宿している失職中の安井という青年 (安井昌二) は、千鶴の亡き夫の弟です。この下宿には三女の節子が入り浸っています。

ある日東京から安井の親友の雨宮 (三島耕) が仕事で奈良を訪れます。浅井家の生活はずいぶん賑やかになってきます。そんな日々を過ごすうち、節子は雨宮が次女の綾子に気があるのではないかと思うようになります。綾子の方も雨宮に好意を持っていると知った節子は、今の映画やドラマではお約束の一策を練ることになります。互いの名を語ってそれぞれ待ち合わせに誘い、二人の想いを恋に発展させようという企み。節子は十五夜の月明りの下で二人が愛を囁きあうロマンチックな妄想を膨らませますが……。そして、長女の千鶴にも……。本作は、田中絹代監督による 70 年近く前のラブコメディともいえるかもしれません。



千鶴 (山根壽子) 節子 (北原三枝) 綾子 (杉葉子)



田中 絹代 (1909 年 11 月 29 日 - 1977 年 3 月 21 日)

日本映画界を支えた大スター。日本映画史を代表する大俳優の一人。清純派スターとして人気を得て、松竹の看板俳優となった。戦後は演技派として成長、脇役を演じることが多くなるも円熟した演技を見せた。

晩年は「サンダカン八番娼館 望郷」の演技でベルリン国際映画祭銀熊賞 (最優秀主演女優賞) を受賞。主な作品に「マダムと女房」「愛染かつら」「西鶴一代女」「雨月物語」「煙突の見える場所」「檜山節考」などがある。

監督作品には「恋文」(1953 年、新東宝)「月は上りぬ」(1955 年、日活)「乳房よ永遠なれ」(1955 年、日活)「流転の王妃」(1960 年、大映)「女ばかりの夜」(1961 年、東京映画)「お吟さま」(1962 年、文芸プロ) の 6 作品がある。

当時のインタビューで「俳優は一人のキャラクターを表現するもの。全体的に表現したいので、監督にならないと、と思った」と述べている。

「男性映画」とは言わないのに「女性映画」、「はて?」。といいそうになります。長年男性支配が続いていた映画制作現場も、現在では、多くの女性スタッフ、監督がいます。

日本で最初の女性監督は溝口健二監督の助監督/スクリプターとして働いていた坂根田鶴子。二人目が溝口の映画に多く出演したスター女優の田中絹代でした。この映画の企画は日本映画監督協会です。